

# 靴の歴史散歩 ⑦⑧

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

今号からは、また元のように、知られざる業界資料を紹介しながら、先人の事績を顕彰していきたいと思っている。

明治末から大正、昭和初期にかけて『幕末百話』、『銀座百話』、『幕末明治女百話』など百話シリーズで大いに読者を魅了した篠田鑛造（元・報知新聞記者）なる人の、聞き書き実話本というのがある。

現在でも復刻版が出ているのでご存知の方も多いかと思う。

その中の『明治百話』（四條書房・昭和6年刊）に、かつて芝区桜田伏見町二番地（現・港区新橋2-1-3）にあった靴と鞣の専門店、内田直二商店のことが出るので、ご披露したい。

## 「F屋 内田靴店 晩翠軒

虎の門にF屋という呉服屋があつて、金比羅さまの十日には、なかなか繁昌をしていたもので、表通りへ店を構え、鬼門へ虎の像を吼えさせて、大いに拡張をやらしたが潰れてしまった。（中略）

……それに反して桜田本郷町の南角にある靴店内田。今はビルディングとなって立派な店になったものの、その初めは、今のところよりモット新橋寄りのところに、主人はガラス戸の中で、白いというよりは、汚れた腹掛けをかけて、古靴直しをコツコツ、金槌で叩いていたものです。それが新聞広告から信用販売の基礎を開き、とうとうあすこまで築き

あげたという。努力奮闘は、通行人の著者もよく感心させられたものです。

晩翠軒も新橋土橋寄りのところに、山の手から左側に、床店（人の家の軒先を借りたような小さな店）ぐらゐの支那雑貨を開店して、珍しい店があると思わせたのが、だんだん膨張して、ああした大店となったものですから、驚かれたものです。

晩翠軒にしろ、内田靴店にしろ、主人は誠實に業務の発展を計っていたように感じましたが、F家の主人は、どうも誠實味を欠いていたようである。（中略）……潰れる家と、ノダツ家とは、どうしても主人の努力と誠實とに因るものと通行人の著者から、外目八目のような気がして見え透いた次第です。」と、終っている。

本文では、F家も実名で載せ、その不実さも実例で詳記しているが、主題は内田商店なので、あえてその部分の転載は、略させていただきます。（この項続く）



『内田直二商店靴鞣定価表』（明治40年頃）より転載。